

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12990

研究課題名（和文）1910～20年代の無声映画伴奏のグローバルな展開の解明 日米独の比較研究

研究課題名（英文）The global and transnational relationships of silent film music among Japanese, US and German silent film

研究代表者

白井 史人（SHIRAI, Fumito）

慶應義塾大学・商学部（日吉）・准教授

研究者番号：20772015

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は1910～20年代の日本、アメリカ、ドイツにおいて、無声映画がどのように上映されていたのかを、伴奏音楽に着目して明らかにすることを課題とした。日本、ドイツ、オランダ、アメリカ等の無声映画関連資料の収集・調査を進め、その成果に基づき、地域を横断する同時代的な広がりや、各地域の特色ある実践からなる無声映画伴奏の実態を、各国での比較を交えて一定程度解明することができた。その成果は、音楽学や映像研究を対象とする内外の学会における口頭発表や論文として発表したほか、一般向けの学術書籍の刊行（『世界は映画でできている』、『ベートーヴェンと大衆文化』）や実践的な上映の実施を通じて広く公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、音楽学や映像学の成果を組み合わせることで新しく確立しつつある映像音響研究という分野において、研究アプローチが困難であった無声映画期の実践の地域を越えた広がりや変遷を明らかにした点にその学術的意義がある。

映像と音声が同期するという現在では一般的と思われるメディア史および美学上の前提に対して、歴史資料に基づき再考を促すことで、現在大きく変遷を遂げ続けている映像音響メディアの可能性を問い直す意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：This research involves investigating the global and transnational relationships of silent film music among Japanese, US and German silent film from the 1910s to the 1920s. Based on the materials collected from archives in Japan, Netherland, the USA and Germany, this research clarifies the contemporary distribution process of the praxis across the national borders and local characteristic developments of accompaniment styles. These results have been presented at renowned international academic conferences. Furthermore, several papers have been published in Sekai ha eiga de dekiteiru [The world is constructed of cinema!] (co-editor, 2021, in Japanese), Beethoven to Taishu bunka [Beethoven and mass culture, 2024, in Japanese] and The Routledge companion to global film music in the early sound era (Chapter 36, 2024, in English).

研究分野：映像音響研究、音楽学、表象文化論

キーワード：映像音響研究 無声映画伴奏 グローバル・ヒストリー 日独比較研究 音楽学 映画学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

19世紀末に登場した映画というメディアは、映像技術だけでなく、演劇、音楽、舞踊、語りなどの様々なジャンルを組み込んで今日にいたるまで変化を遂げている。さらに、テレビ、ビデオ・ゲーム、オンライン動画などの多様な視聴覚メディアへと拡がり、社会学や認知科学などの観点からも注目を集めている。本研究は、昨今のこうした視聴覚メディアの展開を踏まえ、映像と音楽が生む視聴覚体験を、歴史研究と作品分析を組み合わせることで解明することを大きな目的とする。

映像と音楽・音響に関する初期の研究は、映画学・音楽学における各論や、歴史的な面での概論にとどまっていたが、1980年代以降には、北米やフランスを中心に分析手法・用語の整備が進み、歴史資料研究、物語叙述上の機能分析などの方法を基礎として独立した学問領域として確立しつつある。こうした研究の蓄積は、ジェンダー、技術史、既成ジャンルとの比較など、映画の音楽を巡る様々な問題を提起している。そうした中で、本研究は「1910～20年代の日本、アメリカ、ドイツにおいて、無声映画がどのように上映されていたのか」を明らかにすることを主たる課題とした。

映像と音声をフィルムに記録し再生するいわゆる「トーキー映画」が世界的に普及するのは1930年前後である。それ以前の1910～20年代は、映画館ごとに音楽や語りなどが付され、国や地域によって異なる独自の実践が普及した。それゆえ一次資料に即した実証的な解明が困難な領域とされてきたが、1910～20年代は、映画が芸術上および商業上のプレゼンスを世界的に大きく拡大させる重要な時期でもあった。映像と音声が一对一で対応する今日の映像音響の一般的な形が確立しつつあった過渡期の実践を明らかにすることが、本研究の課題と言える。

1990年代には、英語圏のマークス (Marks, *Music and the Silent Film*, 1997)、ドイツ語圏のジーベルト (Siebert, *Filmmusik in Theorie und Praxis*, 1990)らが楽譜資料の収集・調査や同時代雑誌の検討などの手法を整備し、各国での実践の実態を明らかにしてきた。こうした各言語圏での無声映画研究の進展は、世界各地の映画研究者やアーキビスト、また伴奏者が集う国際映画祭での情報交換を通じて、そのグローバルでダイナミックな歴史的展開のあり様が解明されてきている。また無声映画への関心は、映画学および音楽学それぞれの新たな史実を解明することとまらない。映像と音声がフィルムという物質的媒体や、磁氣的・光学的情報から離れた現代のデジタル化が進展する現在 (渡邊大輔『イメージの進行形』、2012年)、無声映画期の映像と音楽は、現在の映像および録音メディアの意義を再考する格好の材料として着目を集めている。

2. 研究の目的

前項で示した映像・音響の双方を巡るメディア史、およびその研究史の現状を踏まえ、本研究は、楽譜、フィルムおよび文献などの一次資料の収集・分析という歴史研究の手法を徹底しつつ、国家、地域、言語の枠組みを超えた無声映画伴奏のグローバルな展開のあり方を解明することを目指す。

3. 研究の方法

日本、アメリカ、ドイツなどに所蔵されている一次資料の収集・分析を行い、データベース作成などの作業を通じて、参考上映・演奏や研究発表を進める。本研究の方法は、以下の3つの視点を特色としている。

①地域や言語を横断する比較文化史的視点…ドイツおよび日本に関する事例研究の経験を生かし、日本語、英語およびドイツ語でアクセス可能な関連資料を体系的に調査する。

②音楽学と映画学の双方の知見を組み合わせる領域横断性…音楽学的手法に基づくドイツの事例に関する研究手法や、映画学を背景とする日本の事例に関する研究経験を活かし、映画学・音楽学の方法論、人的ネットワークおよび資料館の連携を進める。

③歴史研究と現場での実践をつなぐ双方向性…これまでの研究において、早稲田大学演劇博物館での共同研究の枠内で歴史的考証に基づくライブ伴奏を含む無声映画上映を多数企画してきた。その際に培った演奏家や活動写真弁士とのネットワークを活用して、上映などで中間的成果を公開し検討することで、更なる資料調査・分析へと繋げる。

4. 研究成果

本研究は1910～20年代の日本、アメリカ、ドイツにおいて、無声映画がどのように上映されていたのかを、伴奏音楽に着目して明らかにすることを課題として、2019年度より研究を実施してきた。その成果は、以下のようにまとめられる。

①国内外の資料館における資料の収集および調査

2019年度には、カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校図書館に所蔵されているアメリカ発行の伴奏用例集（キュー・シート）のデータ入力など基礎的な調査を行った。またドイツ（ベルリン、ドイチェ・キネマテーク）やオランダ（アムステルダム、EYE映画博物館）などでの楽譜や文献の基礎的資料調査を実施した。コロナ禍に伴い国外資料館での調査は当初の予定よりも進展しなかったが、研究の基礎となる一定規模の資料を収集することができた。また国内の資料としては、早稲田大学演劇博物館に所蔵されているチラシ資料の基礎調査を行う共同研究に従事し、その成果の一部を本研究にも活用した。これらの資料の調査を進め、映像作品や伴奏曲が地域を横断していかに形を変えて流通していったのか、一次資料に基づき解明する成果へとつながった。

②国内外の学会における研究発表

こうした調査に基づく研究成果は、日本音楽学会や表象文化論学会などの国内主要学会のほか、2019年度のアジア・ゲルマニスト会議（北海学園大学）、国際画像学会年次大会（タスマニア大学）、2021年度の国際音楽学会東アジア分科会若手研究発表会（オンライン）、2022年度の国際音楽学会大会（アテネ大学）、2023年度の国際音楽学会東アジア分科会大会（台南市立美術館）などで研究発表を継続してきた。

とりわけ国際音楽学会の枠組みでは、2021年度にはひとつの無声映画がドイツ、アメリカ、日本へと国境を越えて流通する際に、どのように音楽や音声に変化していったのかを、楽譜資料やチラシ資料の考証をもとに示した。また2022年度には、ひとつの楽曲に焦点をあて、さまざまな映画の伴奏曲として各地域の実践と結びつき変化しながら流通していく過程を明らかにした。

③研究論文、一般書籍、上映等による成果公開

口頭発表の成果を発展させ、複数の研究論文を所属機関において発表したほか、2021年3月に刊行した『世界は映画でできている』（名古屋外国語大学出版会、共編著：石田聖子・白井史人）や、学術書籍『ベートーヴェンと大衆文化』（2024年、春秋社、沼口隆、安川智子、斎藤桂との共編著）として、学界および広く一般へ向けてその成果を発表した。後者の一般向け学術書籍では、音楽家・ベートーヴェンが1920～30年代の映画においてどのように描き出されたのか、その流通の過程を論じた。加えて、*The Routledge companion to global film music in the early sound era*での寄稿論文（英語）では、日本における事例を中心に広くその成果を発表した。またこうした成果を背景に、名古屋外国語大学世界教養学科やワールドリベラルアーツセンターなどの枠組みを活用し、学生や一般へ向けた上映会を実施した。

今後は、本研究課題を通して形成したネットワークを活用し、映像音響研究の基礎的成果を学界および一般に向けて広く発信し定着させていく。映画学・音楽学にとどまらず、グローバル史、記憶研究、さらに地域研究や思想史とのつながりを意識し、研究領域の広がりや深化に貢献したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 白井史人	4. 巻 65
2. 論文標題 ゴットフリート・フッペルツによる無声映画伴奏の草稿研究	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語・ドイツ文学	6. 最初と最後の頁 73-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 白井史人	4. 巻 29
2. 論文標題 ドイツ映画、越境と分断へのまなざし	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 南山大学ヨーロッパ研究センター報	6. 最初と最後の頁 41-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 白井史人	4. 巻 2020
2. 論文標題 Esoterisch, heroisch oder pathologisch? : Die Konnotationsvielfalt der Dodekaphonie in der Filmmusik der 1930er bis 1950er Jahre	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz: Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo	6. 最初と最後の頁 647-654
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 白井史人	4. 巻 5
2. 論文標題 映像なき伴奏音楽の系譜 溝口健二、マウリシオ・カーゲル、坂本龍一	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Artes MUNDI	6. 最初と最後の頁 49 64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 白井史人、山上揚平、柴田康太郎	4. 巻 43
2. 論文標題 栗原重一とエノケン楽団 栗原重一旧蔵資料からみる昭和初期の楽士・楽団の来歴および活動の実態	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 演劇研究	6. 最初と最後の頁 39-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 Fumito Shirai
2. 発表標題 A genealogy of film accompaniment music without visual images from the viewpoint of its historiographical and dramaturgical functions
3. 学会等名 The 7th Biennial Conference, International Musicological Society, East Asia (国際学会) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 白井史人
2. 発表標題 「表現」性の翻訳 ドイツ映画の内外における流通と聴覚的要素
3. 学会等名 表象文化論学会第16回大会 (東京都立大学)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Fumito Shirai
2. 発表標題 Chasing chase music: The global dissemination of silent film accompaniment during the 1920s and its localized practice regarding "Dramatic Allegro"
3. 学会等名 21st Quinquennial Congress of the International Musicological Society (IMS2022) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 白井史人
2. 発表標題 栗原重一と名古屋 松坂屋から浅草へ
3. 学会等名 シンポジウム「モダン文化の 場所 - - 松坂屋、地方映画館、名古屋の洋楽」(名古屋外国語大学)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Fumito Shirai
2. 発表標題 Silent Film Screenings across National Borders: Transnational Circulation of Der letzte Mann/The Last Laugh and its Varying Accompaniment Methods
3. 学会等名 IMSEA Virtual Conference for Graduate Students and Early Career Scholars (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白井史人
2. 発表標題 ゴットフリート・フッペルツによる無声映画伴奏の草稿研究 オークストラの拡張と初期トーキー映画への過渡的表現
3. 学会等名 第72回日本音楽学会全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白井史人
2. 発表標題 ドイツ無声映画の国外における上映と伴奏 宣伝資料と楽譜から
3. 学会等名 早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点 公開研究会「映画宣伝資料にみる無声映画興行の諸相」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 白井史人
2. 発表標題 無声映画伴奏譜「ヒラノ・コレクション」再考：大正・昭和初期映画館チラシから
3. 学会等名 早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点公開研究会「演劇博物館所蔵「大正・昭和初期映画館チラシ」が埋める無声映画史の隙間」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白井史人
2. 発表標題 1920～30年代の映画とベートーヴェン：断片化とナショナリズム
3. 学会等名 日本音楽学会第71回全国大会 パネル「100年前のベートーヴェン」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 白井史人
2. 発表標題 伴奏譜が語る1920年代ドイツ無声映画（シンポジウム）
3. 学会等名 国際シンポジウム「伴奏譜が語る1920年代ドイツ無声映画」（龍谷大学）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白井史人
2. 発表標題 Politics of melody: Representation of postwar occupied Okinawa in Toru Takemitsu 's film music (口頭発表)
3. 学会等名 RIdIM 19th International Conference "Belonging and Detachment" (タスマニア大学・オーストラリア) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白井史人
2. 発表標題 音が「視せる」映画 無声映画、シェーンベルク、坂本龍一（講演）
3. 学会等名 WLAC Premium Cinema Talkシリーズ No.3（名古屋外国語大学）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白井史人
2. 発表標題 Esoterisch, heroisch oder irrsinnig?: Der Funktionswandel der Dodekaphonie in der Filmmusik der 1930er bis 1950er Jahre（口頭発表）
3. 学会等名 Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo（北海学園大学）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白井史人
2. 発表標題 モチーフから音響へ 1920年代のドイツにおける「オリジナル作曲」の変遷
3. 学会等名 第14回表象文化論学会大会（京都大学）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 分担執筆：白井史人（第36章）、編者：Jeremy Barham	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 807
3. 書名 The Routledge companion to global film music in the early sound era	

1. 著者名 白井史人（共編著、第2章執筆）、沼口隆、安川智子、斎藤桂編著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 285
3. 書名 ベートーヴェンと大衆文化 受容のプリズム	

1. 著者名 石田聖子・白井史人編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 名古屋外国語大学出版会	5. 総ページ数 340
3. 書名 世界は映画でできている	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------